

生き

正伝の仏法を慕う

上

石川 和幸



映画『ビルマの堅琴』を観ました。山林から街中へ下りてきた僧の汚れた法衣を見て、「なんて厳しい修行をなされたのか」と町の人が恭しく供養をする。今の日本なら「何だ、物乞いか」と思う人もいるでしょう。托鉢を行じての実感です。

「チチキトク スグカエシ」。一九八五年、突然の知らせで、私は米国から帰国しました。天国と地獄を行き来するかのような闘病の末、桜花満開の時節に父を見送りました。葬儀、納骨と済ませ、初盆までには少し間があると参禅の旅に出ました。旅の最後の永平寺で「もう少し坐りたい」と申し出た私が連れて行かれたのは、山峰を幾つも越え、雪は祖山、永平寺の三倍も降りつもる山奥の寶慶寺(福井県大野市)でした。永平寺の重役を退き、滋賀県の自坊を息子に譲った後、単身入られた故北野良道老師がおられました。由緒はあるが、檀家も寺縁もないボロボロの廃寺同然の山寺で、寺の子ではない修行僧二人とともに、坐

禪、托鉢、精進食の禅の生活を送っていられた。人は無常に遭遇したとき、出家を志すといわれる。「発菩提心」である。これは言葉に置き換えることのできない究極の救いの道歩く決意にほかなりません。無心に真実を生きたいと願う心です。無から生まれ無に戻って行く人生とはどういふことなのか。誰からも邪魔されることなく自分自身と向き合うことで

配されたとき、在家の宗教では救いきれない活路を求めて、法の道を行く出家僧となる。そこには今も昔も変わらない、積尊自身がなされた決して生やさしくはない、永きに渡って受け継がれた、実体験で裏打ちさ

いしかわ・わこう 1955年、東京都生まれ。明治大文学部卒業。82年サンフランシスコ市立大コンピューター情報処理学単位満了。米国大使館(東京)、(財)日本国際協力センター勤務。87年大本山永平寺にて得度、寶慶寺専門僧堂安居。96年僧籍取得。富山専門尼僧堂、愛知専門尼僧堂安居。「中外日報」「松」(永平寺発行)などに執筆。「深雪庵だより」(年2回)を発行。千葉県市川市在住。

再び「オウム」を生まない

迷妄打破へ出家修行

しかし、無常感からはい上がるすべはありません。それは自分自身を見つめ、自己の本質に気づくことです。自分の「弱さ」の正体を知ることにもいえます。親近者の死。対人関係、恋、金、裏切り。怒り、無知、我欲。得意げになったり落ち込んだりする自分の弱さ。

突き詰めれば、家族には許しがある。だから人は真の、深の、底の無常感に支

れた修行そのものがあるのです。修行が自分で自分を救ってくれるのです。修行の道場・寶慶寺には自己と向き合うことのできる時間と場所とがありました。

その後、私は有給休暇をためては、小遣いをためては、参禅を続けることになりました。男女にかかわらず僧も俗も自由に出入りができる公界の道場・寶慶寺があったからこそ、私は自殺もドラッグにも、そしてカルト

あなたの周りにはいないだろうか。私にはいた。東大を卒業して有名私立大学の教員になった知人、母親が一人で苦勞して学習院大を卒業させ一部上場企業に就職した友が。彼らは「オウム真理教」の信者となって走って行って、今もって消息はわかりません。

私たちの社会は、元をたどれば天地十方のどこかで有縁無縁の無限の結がりで造られています。その私た

ちの社会が「オウム」を造り出してしまったのです。自分は被害者でも加害者でもなく仏教にも関心がないからと、傍観者を決め込むことで果たしてカルトの再発は防げるのでしょうか。実は無意識のうちに社会の一員としてカルトの発生に加担していたのかもしれない。そう思うことは、もう決して「オウム」を生まないという決意と共振する大切な動機となります。

伝統仏教寺院の大方が経営に懸命で本筋の仏道を行じる力は薄らいでいます。僧侶にでもなれば少しはかっこうがつくし、食べてもいけるという、にわか出家も確かにいます。そんな今日、本来の僧侶の形態である出家修行者は隠され、軽視されているのが実情です。

積尊自身が実際になさり、歴史の荒波を越えて今に伝わる出家修行は、迷妄打破の最も信頼できるセーフガードです。この正伝の仏法を僧と俗がともに慕い、尊び、伝え合うことが必要なのです。なぜならば、このままではカルトは必ず場所と形を変えて、また生まれるに違いないと思うからです。